

# のら犬

(童話)

-

ました。

常念御坊は碁が何よりも好きでした。けふも、となり村の檀家へ法事でよばれて来て、お午すぎから碁をうちつゞけ、日がかげつて

来たのでびつくりして、腰を上げました。

「まあ、いゝぢやありませんか。これからでは途中で夜になつてしまひます。今夜はとまつていらつしやいませよ。」と、引きとめられ

「でも小僧が一人でさびしがりますから。幸に風もごさいませんので。」と、おまんぢうのつゝみをもらつて、かへつていきました。

常念御坊は歩きながらも、碁のことばかり考へつゞけておました。さつきの一ばんしまひの、あすこのあの手はまづかつた、向うがあゝ来た、そこであすこをバチンとおさへたそれから来たから、かうにげたが、あれ

新美 南吉

はやつぱり、こつちのところへ、かうわたるべきだつた、など、夢中になつて歩いて来ました。そのうちにその村のはづれに近い、烏帽子をつくる家のまへまで来ますと、もう冬の日もとつぶりくれかけて来ました。

しばらくして何の氣もなく、ふと、うしろをふりかへつて見ますと、ちきうしろに、犬が一びきついて来てゐます。狐色の毛をした耳のびんとつツたつた、あばらの間のやせくぼんだ、不氣味な、よろ／＼犬です。どこかこゝいらのかひ犬だらうとおもひながら、また碁のことを考へながらいきました。

一二丁いつて、またふり向いて見ますと、さつきのやせ犬が、まだとほ／＼あとを追つて来てゐます。うすぐらい往來のまん中で二

三人の子どもがコマを廻してゐます。

「おい、坊、この犬はどこの犬だい。」

子どもたちはコマを足とめて、御坊の顔と犬を見くらべながら、

「おらアしらねえ。」

「おいらも、しらねえ。」と言ひました。

常念御坊は村を出はづれました。左右は麥島のひくい岡で、人つ子一人をりません。うしろを見ると、犬がまだついて来てゐます。

「しッ。」と言つて、にらみつけました。にげようともしません。足を上げて追ふと、二三尺ひき下つて、じつと顔を見てゐます。

「ちよッ、きみのわるいやつだな。」

常念御坊は、舌うちをして歩き出しました。あたりはだん／＼にくらくらなつて来ました。

うしろには犬がのそくついて来てゐるのが見なくもわかつてゐます。

すつかり夜になつてから、峠の下の茶店のところまで来ました。まつくらい峠を、足さぐりてこすのはあぶないので、茶店の婆さんに提灯をかりていかうとおもひました。

お婆さんはふろをたいてゐました。提灯だけかりるのも、へんなので、常念坊は、

「おい、おばあさん、だんごは、もうないかな。」と聞きました。

「たつた五くしのこつてゐますが。」

「それでいゝ。つゝんでおくれ。」

「はいく。」と、おばあさんは、だんごを竹の皮につゝみます。

「すまないが、わしに提灯をかりしておくれん

か。あした正觀にもつて來させるでな。」

「とても、やぶれ提灯でござんすよ。」

「いゝとも。」

おばあさんは、だんごをわたすと、上へ上つて、古提灯のほこりをふきくもつて來ました。常念坊は提灯にあかりをつけると、あたりを見て、

「おや、もう、どつかへいつたな。」と一人ごとを言ひました。

「おつれさまですかね。」

「いんにや。どつかの犬が、のこくついて來て、はなれなかつたんだよ。」

「狐ぢやありませんか。あなたのとほつていらつしやつた、あのさきの藪のところに、よく狐が出て人をばかすと言ひますよ。」

「おもしろくもないことを言ひなさんな。ほい、おあしをこゝへおくよ。」

常念坊は片手に、おまんぢうのつゝみと提灯をさげ、片手にだんごのつゝみをもつて峠にかゝりました。その峠を下りて、たんぼ道を十丁ばかりいくと、じぶんの寺です。

もう、あのいやな犬もついて來ないので、安心して、てくく上つていきますと、やがてうしろの方で、クンクンといふ聲がします。

「おや、また、あの犬めが來たな。」と常念坊はおもひました。

かまはずどんくゝいきました。ふと考へると、うしろから來るのは、さ



つきの犬ではなくて、お婆さんが言つた、あの狐がつけて來たのではなからうか。かうお

もうと、じぶんのうしろには、ずるい狐の目が、やみの中に、らんくくと光つてゐるやうな気がします。氣の小さい常念坊は、ぶるつと、身ぶるひをしました。

でも、うしろをふり向くのもこはいのて、ぶきみなりにぐんぐん歩きました。何だかうしろでは、狐がいつの間にか女にばけてゐて、今にも、きやつと言つてとびついて來さうな気がします。

常念坊は、その狐のことをわすれようとするやうに、提灯のあかりばかりを見つめてあるきました。

## 二

やつとのこと村へ來ました。村へはいると

少しほつとしました。村ではどこのうちも、

よひから戸をしめてしまふので、どつこも、しいんとしてゐます。その中で、どこかのうちで、きぬたをうつ音がとほくにきこえます

そのとき、ふと氣がついて見ますと、左手にもつてゐた、だんごの竹の皮づみみが、いつの間にかなくなつてゐます。

「おや、しまつた。うつかりして、おとしたかな。それとも狐のやつが、そつと、ぬすみとつてにげたかな。ちよつ。」

常念坊はいまくしさうに、おまんじうのつみと提灯とを兩手にもちわけて、うしろをむいて見ました。もう何もありません。やがて寺の門のまへに來ました。

立ちどまつて、もう一べん、うしろをよく

見ますと、狐らしいものが、のこくつけて來てゐます。

常念坊は門をはいると、

「正觀。正觀。」と、庫裡の方へ向つてどなりました。

「はい。」と返事がきこえて、正觀が、ごそごそ鐘樓から下りて來ました。

「おい、狐だく。ほうきをもつて來い、ほうきを。ほうきで追ひまくれよ。」

正觀はとんでいつて、ほうきをもつて、門の方へかけつけました。

「おや、狐が何かくはへてゐますよ。」

「あゝ、だんごだ。とり上げろよ。」

「ほい、下へおけ。——だんごはとりかへし

ましたが、狐はすわつたきりにげません。」

「だから、ほうきで追つばらへといふのに。」

「ちきしよう。にげんか。しつ、くく。」

と、正觀は、ほうきでおひまくりました。「そらくそつちへいつた。中へはいつて來た。そらくく。」

「ほうい、ちきしよう。こらッ。」と正觀は、そつちこつちと追つかけて、とうく外へにがしてしまひました。

「にげたか。」

「にげました。」

「正觀。」

「はい？」

「何でおまいは今ごろ鐘樓なんぞへ上つてゐたのだ。」

「さびしかつたから。」

「鐘樓へ上つてればさびしくなくなるのか。」

「鐘をゲンコツでたくと、おん、く、おんと、和尚さんの聲みたいな音がするんです。」

「何を言ひをる。」

和尚さんは、ころもをぬいて、ろばたで、おぜんにすわつて、さぶさぶくと、お茶づけをながしこんでゐます。

正観は、おみげのだんごをひろげました。

「和尚さん、あの犬はどこから、ついて来たのです。」

となり村から、しつツこく、あとをつけて来たのだよ。」

「どうして。」



「どうしてだかしらないよ。」

「ばかしやアしませんでした?」

「おれが狐なぞにばかされてたまるか。」

「狐ですか、あれは。」

「……」

「犬みたいだつたがな。そのしようこに、正観はそばへよつても、ちつともこはくはな

つたがなア。」

常念御坊は、はしをおいて考へこんでゐました。あんだんの灯が、そのくるく頭へ赤くさしてゐます。

しばらくして常念御坊は、

「正観」と、少しきまりわるさうに言ひました。

「その提灯をつけよ。」

「はい。」

「わしは、ちよつといつてさがして来るでな。おまいは、本堂の縁



の下へ、わらをどつさり入れといてくれ。」

「何をさがしに?」

「あの犬をつれて来るんだ。」

「狐でせう、あれは。」

「かはいさうに、犬なら、のら犬だ。食ひものもろくに食はんと思えて、ひどくやせこけてゐた。はるく、なり村から、わしにつ

て来たのだから、あつたかくしてとめてやらうよ。」

それに、わしのおとしただんごまで、ちやんと、くはへて、来てくれたんだもの、おれ

がわるいよ、と、これだけは、心の中で言つて、常念御坊は、提灯をもつて出ていきました。

た。